

民間まちづくり会社と NPOによる御祓川再生事業

株式会社 御祓川 チーフマネージャー 森山 奈美

はじめに ~七尾市と御祓川~

能登半島のちょうど付け根に位置する七尾市（人口4万7千人）は、古くは万葉の時代から港町として栄えた能登の中核都市である。その中心市街地



を南北に貫く形で流れているのが御祓川。旧暦6月晦日みそかに夏越の大祓い神事がこの川で行われていたことから、このような美しい名前がついたという。しかし、地盤沈下による河床勾配の減少、放水路の整備による流量減少、生活排水の流入によ

って水質の汚染は進み、河床にたまったヘドロから夏になるとメタンガスが発生する、臭い“ドブ川”となってしまった。



能登最大の祭礼「青柏祭」で賑わう御祓川周辺

民間まちづくり会社(株)御祓川の設立

(1) 危機感から港のまちづくりへ

昭和の終わり頃、七尾市の都市活力は非常に衰退していた。モータリゼーションの波に乗り遅れ、商圈が急速に縮小したその頃の七尾は、経済的な冷え込みだけではなく、何より市民の心に倦怠感

が漂っていた。「このままではいけない」と、立ちあがったのは(社)七尾青年会議所の若手経済人たちであった。“港を中心としたまちづくり”というキーワードを得て、古くから香島津と呼ばれ天然の良港として栄えた七尾港を財産として、港からまちを再生していく「七尾マリンシティ構想」を立案し、この構想の推進母体として七尾マリンシティ推進協議会が設立された。

同構想における優先順位の高い事業として、1991年に七尾フィッシャーマンズワーフ「能登食祭市場」がオープン。市民が忘れ去ったフェリー埠頭が、現在は年間90万人が訪れる交流拠点に生まれ変わった。

(2) 港からまちへ

能登食祭市場の成功は、停滞していた駅前再開発にも刺激を与え、95年に駅前第一地区再開発ビルとしてパトリアがオープン、七尾市は中心市街地に2つの大きな集客核を持つことになる。この2つの核をシンボルロードで結ぶことによって集客力を中心に吸引し、既存の中心商店街への波及効果を狙うというシナリオを描き、まちづくりが進められている。ところが、このシンボルロードとなる道路の脇に流れているのが、前述の汚染された

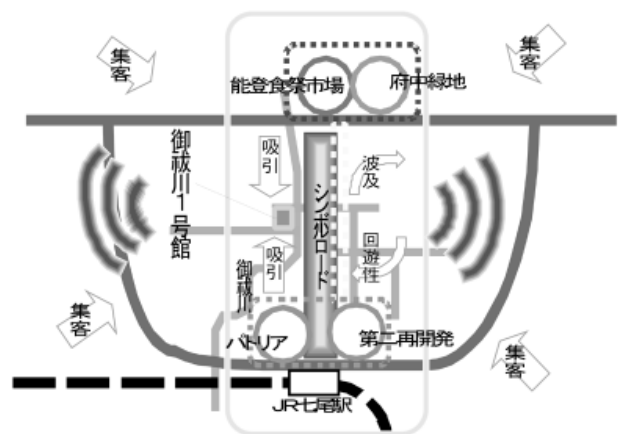


図1 2つの集客核から中心市街地へ

民間まちづくり会社とNPOによる御祓川再生事業

株式会社 御祓川 チーフマネージャー 森山 奈美

御祓川である。2つの核を結ぶ軸づくりにあたっては、この御祓川の再生が不可欠であると考えた企業経営者らが設立したまちづくり会社が「株式会社御祓川（以下(株)御祓川）」である。

(3) まちづくり会社 (株)御祓川

平成11年6月、民間まちづくり会社(株)御祓川が5,000万円の資本金で設立された。(後に増資して6,800万円)設立時の出資者8名は、七尾マリシティ運動に当初から携わってきたメンバーである。取締役6名スタッフ7名で、まちづくり会社として、次のような事業を展開してきた。

御祓川の浄化に関わる事業

御祓川水質浄化ワークショップ：水質浄化技術を持つ企業へ呼びかけ、御祓川浄化方策の提案を元にシンポジウムを開催し、検討内容を県・市に提案。ヘドロの浚渫など公共事業化につなげた。

御祓川浄化研究会：七尾商業高校の生徒からの提案を元に、ばっ気方式による水質浄化システムを御祓川で実験。県・市・NPO・企業・学校による共同研究体として活動中。成果を県・市に提案し、平成15年度も実証実験に取り組む。



川に空気を送り込むばっ気方式による浄化実験

界隈の賑わい創出に関わる事業

寄合処 御祓館の整備：TMOである七尾街づくりセンター(株)との協働によって、商業インキュベーター施設整備事業として、新規開業者のための貸店舗を御祓川沿いの拠点施設として整備。暮らしっく館 葦・いしり亭(直営店)の運営：川沿いに高品質な店舗を集積させ、川の魅力を向上させるため、(株)御祓川の直営店として工芸品店と飲食店を運営。能登の生活文化を川沿いから発信している。



寄合処御祓館は御祓川沿いのシンボリック建物である

御祓川2号館への出店プロデュース：御祓川界隈に訪れる人を惹きつける魅力的な店をプロデュース。1階には、麺類・定食を中心とした飲食店、2階には環境に配慮した美容院を誘致。

テナントミックス計画の立案：御祓川右岸にあたるシンボルロード沿道を都心軸として位置付け、TMO事業の一環としてテナントミックス計画を立案。今後、本格的な誘致活動が必要。川沿いの賑わい創出に取り組む。

コミュニティ再生に関わる事業

川への祈り実行委員会：川づくりのNPOとして、会員約20名が「川と市民の関係を取り戻す」ための事業を継続的に展開。「川はともだち」を合言

葉に、幅広い市民の参画をサポート。詳細後述。
七尾湾沿岸全住民会議の事務局：七尾湾の浄化に取り組むNPOの事務局を担当。必要に応じて、川への祈り実行委員会や御祓川浄化研究会と協力して事業を展開している。

全国ドブ川市民サミットの企画運営：全国の都市河川の再生に取り組む先進地からの参加を得て、2000年にシンポジウムを開催。ドブ川市民サミット宣言（後掲）を採択した。

各種イベント企画運営：公共事業による基盤整備にあわせて、泰平橋開通イベントや長生橋開通イベントなど、川沿いの賑わいをつくる各種イベントの企画運営を行う。

店から川を見つめる

我々の運動では、御祓川再生にあたり「店」という仕掛けを使っていることが特徴である。(株)御祓川がプロデュースした美容院では、2階から見下ろす御祓川の風景を楽しみながらヘアスタイルを決め、髪を切りながら「川がはやくきれいになったらいいね、できることからやろうね」という会話を交わし、きれいになった女性をどんどん川の周りに送り込んでくれる。川沿いに移転するにあたって、パーマ液等の排水を無害にして流すシステ



写真4 御祓川を見下ろす待合カウンター

ムを取り入れるなど、川のあるまちで商売をさせていただくという基本的な姿勢を貫いている。

飲食店では食べることを通じて水の大切さをアピールし、地元の工芸品を紹介することで、御祓川が育んだ七尾文化に触れていただく。夜になると店の灯りが情緒的な川沿いの風景を創り出す。

その町で商売をする人が、本気で自分の家業を見つめなおしていくと、まちの文化のお陰で自分の商売があるということに気づく。つまり、川が汚いということは、自分の商売にとってもマイナスだということ。川沿いの店は、川に目を向ける人々を増やし、私たちのまちが持っている財産を確かめ合う場であり、川沿いに元気を吹き込む窓なのである。このように御祓川では、川沿いの店からの働きかけによって、まちと一体的な川再生を目指している。

川への祈り実行委員会

川の再生は、市民が主体的に関わってこそ進められる事業である。(株)御祓川では、川づくりNPOである「川への祈り実行委員会」の事務局を担当している。市民約20名の呼びかけにより、ふるさとの川再生に役立てる資金を「川への祈りファンド」として集め、協力者にはステッカーを渡して日頃の排水に気をつけてもらうなど、広く市民からの協力を募る運動を展開した。

市民から集めたファンドを元に、御祓川と市民の関係を取り戻すための事業を展開している。川そうじ&川あそびや源流への遠足、ふるさとの川セミナーのほか、地元のコミュニティFMの協力によって、毎週水曜日に川の話を提供するラジオ番組を放送している。年に1回、川への祈りコンサートを開催し、これまで川に関心のなかった層へも音楽を通じてメッセージを発信している。

川への祈り実行委員会の活動は、ドブ川と呼ばれ

民間まちづくり会社とNPOによる御祓川再生事業

株式会社 御祓川 チーフマネージャー 森山 奈美



子供たちにとっては川そうじも遊びのうち

て背を向けられた川と、もう一度寄りを戻し、新しい関係を築いていこうとしている。合言葉は「川はともだち」。「きれいになったら・・・ではなく、ドブ川のままでもいいから、まず市民と川との関係を取り戻すところから始めよう」と、不定期開催していた「川そうじ&川あそび」を平成14年

度からは毎月定例開催し、気軽に市民が川に関わるための仕掛けをしている。

情報処するべ蔵

七尾は明治時代に二度の大火に見舞われており、その影響で旧市街地には多くの土蔵がある。シンボルロード整備事業による道路拡幅に伴い、取り壊しが決まっていた萬谷氏所有の土蔵もそのひとつである。内部がアテ造りでケヤキの棟木をもつこの蔵は、七尾が最も栄えた頃の御祓川沿いの街並みを今に伝える建造物である。

七尾市はこの萬谷氏の蔵を保存し、まちづくり総合支援事業によってまちづくり会館の機能を持つ「情報処するべ蔵」として整備したが、常駐職員がおらず鍵がかかった状態であった。そこで、市民を中心とした「するべ蔵運営検討委員会」を設立し、するべ蔵の運営方針や業務内容を検討、する

ドブ川市民サミット宣言

ドブ川は臭いです。なぜ、臭く黒い川になったのか。突き詰めていくと、川と私たちの生活の関わりがなくなっていったことに行き当たります。かつて、私たち人間は水の恩恵を川から受け、自分が出した汚れた水は循環して、また戻ってくるということを知っていました。ところが、いつのまにか川が汚くても自分たちの生活には何ら関係がない、たとえ埋めてしまっても何も困らないというくらいに、私たちの生活は川と離れていました。もうそんな風に川に背を向けることはやめましょう。

- 一、市民が楽しく遊び、商い、学び、川と生活との関係を取り戻すことから
- 一、川が育んできた歴史、文化、自然環境、川が果たす役割を知ることから
- 一、川の恩恵を受け、それを活かした店づくりまちづくりを進めることから
- 一、動植物の視点と生き物としての人間の視点を大切に環境づくりから
- 一、市民が責任を持ち、行政が支援する新しい河川管理のしくみづくりから

私たちは、もう一度ドブ川と寄りを戻して、まちの中に生き活きとした水辺を再生することを宣言します。

2000年9月23日 全国ドブ川市民サミット2000 参加者一同



「情報処しるべ蔵」御祓川沿いの新しい拠点である

べ蔵の市民自主運営に向けて話し合いを重ねた。行政が提供しにくいソフト部門を市民が担当し、公共施設を市民で自主運営しようとする試みである。現在は、検討委員会を母体とした「しるべ蔵市民の会 七尾まち役場」を立ち上げ、行政との協働によって、心のこもったまち情報の提供やイベントのサポートを行っている。川沿いに人々が集まってくるための拠点がまた一つ誕生した。

ヒトとミセとマチの関係

御祓川が汚染された物理的な原因は、地盤沈下や生活排水の流入など、前述したとおりであるが、その根底には「市民と川の関係」が薄れたことが問題として横たわっている。川がきれいになれば、人が集まるというが、果たしてそうだろうか。

浄化方策の研究により、技術的には浄化ができると分かったが、市民と関係のないところで進められる浄化では、本当の意味での川の再生とはならない。御祓川は、まちの中で生活の川として流れつづけてきた。ドブ川とは、裏を返せばそれだけ生活とのつながりが深かった川だと言えるのではないか。それが、生活と川の間隔がなくなってしまったために忘れ去られている。市民が相変わらず川と無関係な生活を送っているのは、きれいに

なった川にもゴミを捨てるかもしれない。今更、川で洗濯をする生活に戻ることはできないが、私たちは、新しい川との関わり方を見つけようとしている。

川の周りに、マチとの関わりを重視したミセをつくれば、ヒトは集まり活気を生み出す。そこで、人とモノ、人と人、情報や文化の交流がはじまる。ヒトが集まってマチに主体的に関わっていく。我々は、このような「ヒトとミセとマチの関係を取り戻す」ための取り組みを展開してきた。そして、これらの関係の正常化が、まちづくり会社として我々が目指しているものである。

おわりに

今回、我々の展開してきた一連の運動が、日本水大賞において国土交通大臣賞を頂いたことは、今後の活動の励みとなるものである。これは、民間まちづくり会社だけで、達成できるものではなく、川への祈り実行委員会やしるべ蔵運営委員会などのNPO、多くの市民の方々との連携なくして進めることのできない運動である。今回の受賞は、これまでの活動に携わった人々全員で喜び合いたいし、ご協力いただいた方々に心からお礼を申しあげる次第である。

今後も、川からの恵みに感謝して、一人一人が輝けるまちを育て、川の周りで生まれる物語を次々と生み出していきたい。